

## 電気と私の人生(一)

電気と言っても私の場合、家庭に来ている電気の外、電波、電話、何でも電気に関係する事で、今のパソコンから、デジカメ等一切、私が拘わった電気関係のことを思い出して記してみたいと思う。

私ほど、小学生の頃より八十近くのこの歳まで、電気に関係して生きてきた人は少ないだろうと思う。趣味として軍隊でも関係したし、生活の糧の職業として長く携わってきた。現在老後でも趣味として、又頭の運動として電気に、お世話になっている。

私は記憶のよい方でない。正確な年月は到底思い出せないが、その他は殆ど思い出される。

小学校は尋常小学校(六年)高等小学校(二年)の八年だった。私の電気に関わった最初は高等小学校二年、今の中学一年の頃だ。ラジオが好きで、鉱石ラジオを組み立てて得意になって聞いていた。

親は小遣いを、お祭りでもないといくれない。近くの山で、千本竹と云って鉛筆位の太さで長さ二m位の細竹約千本を切り、束ねて背負って帰り、業者に売り小遣いを稼ぐ。何回か山通いしてお金が貯まってから、白石に自転車部品を買いに行く。エナメル線、絹巻き線、スパイダー枠、鉱石検波器、受話器(ヘットホン)等、生家からだと同分遠い。片道一時間以上はかかる。よく行ったものだ。

組み立てて、J O H K 仙台放送局の電波が聞こえてきたときは嬉しかった。夏休みには(エドヅリ)の田んぼに鳥追いに行く。ガス鉄砲と鉱石ラジオを持っていく。長い竹二本にアンテナを張りラジオを聞きながら、ガス鉄砲といつて、太い竹の底になる部分を残し節を抜く、その中にカイバイトを入れ水を少し入れるとガスが発生する。小さい穴にマツチで火を付けると、鉄砲のようなデツカイ音がでる。田んぼに群がった雀が驚いて一斉に飛び立ち逃げる。

ガスの量が多くても少なくてもデツカイ音がしない。ポンと放屁位の音しかしない時もある。水加減がむずかしい。鳥追いの合間にラジオを聞くのが楽しみだった。放送は一つだけだったから混信はない、充分実用な音量だった。今あの鉱石ラジオがあつても、混信で実用にならないだろう。十七才の八月、国民徴用令で横須賀海軍工廠受信実験所に、同郷の友人と六人入所した。最初は事務だったが、一ヶ月後希望して、三浦半島の中心にある初声受信実験所に転勤した。事務員の肩書きだが、研究以外何でもしなければならぬ。私と守衛の外は、横須賀の本部から海軍バスで通ってくる。

出勤簿の記入、電話の取り次ぎ、約三百坪ある実験所の研究室以外の掃除、本部から運んでくる給食の配膳、大口電源室の管理、三百m位離れた坂下のポンプ場からの水揚げ、夜は実験所の戸締まりと夜中の見回り、自分の食事の支度、守衛と二人で入る風呂の焚き、本当に忙しかった。広い高台の実験所の周りは、一面三浦大根畑で人家はない。農家は周りの低い所であり、どの家の庭にも鈴なりに成った蜜柑の木が植えてある、温暖な土地であった。

給料は同郷の友人より大分多かった。約一・八倍位だったと思う、半年位で事務室に女子が二人入り、大学出の男子事務長も来た。構内に寄宿舎も建ち、本部から通勤だった研究員全員が寮に入り、舎監に星野海軍技術少尉の軍人がなった。

私も寮に入り、希望して研究員にしていた。小学校しか出ていないので、研究員の手助けで、主に工作室で器用さかわれて部品等を作っていた。そこで門前の小僧よろしく、真空管式の受信機の基礎を曲りながらも覚えた。昭和十九年十二月一日浜松航空通信隊に入隊するまでの、初声受信実験所での三年三ヶ月は、私の人生の指針を与えて呉れた、尊い期間であった。